

第三回神学研究会議

総 評

コーディネーター

丸山忠孝

「福音主義の聖書解釈と説教」を主題とした第三回神学研究会議におけるすべての講演・発題・討論を踏まえて、「神のことばの」「積義から」「説教へ」という三点にまとめ総評を試みたい。なお、カッコ内の頁数は、すべての講演と発題を収めた会議記録（日本福音主義神学会発行）のものである。

I 「神のことばの」……福音主義聖書論の前提の確認

A 源泉に帰る

日本福音主義神学会の「聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場」（規約第三条）は、今回の研究会議を含む神学会のすべてのいとなみの前提である。もちろん、聖書が神のことばであるという確信については、先の第二回神学研究会議が取り組んだところであった。しかし、今会議が聖書の積義と説教を主題とする中で、私たちはそ

れが神のことばの積義であり、神のことばの説教であるという福音主義聖書論の前提の再確認を繰り返し余儀なくされた。

このような再確認の作業は、一見無意味であるかに思えるが、積義と説教に関する具体的かつ困難な問題と直面した際、福音主義者が立ち帰るべき源泉であるといえよう。

「神のことばと説教」と題された入船氏の講演はまさにこの点を浮き彫りにした。説教における預言者の働き、との関連で岡氏は言う。

「説教者のつとめの……一番重要な、中心的なことからは何でしょうか。それはテキストが語らんとするメッセージを聴くということに尽きます。このことのために積義も瞑想も、あらゆる営みが集中されるのです。説教者は語る前に聴かなくてはなりません。」（九六頁）と。

また、岩井氏は「実践神学における説教」で、「説教者は、自分が教えられていないのに人を教えることはできない。自分が感動していないのにひとを感動させることも無理である」（一〇四頁）として説教の「神からあたえられたもの」としての性質を強調した。

同様に、聖書を解釈する者のつとめもまた、聖書を神のことばとして、そのみことばの下に自分を置き、そのみことばに聞き従うという信仰者の姿勢を持ちつつ解釈をすること、これが聖書解釈者の源泉への旅と言うことができよう。

B みことばは楽観主義

聖書を誤りのない神のことばとする福音主義聖書論を可能にするもの一つに、みことばに対する楽観主義的態度がある。

この研究会議に先立つ神学会創立十五周年記念講演において、宇田進氏はジェームス・バーが問題提起した「ファンダメンタリズムの特異な宗教性」の一つに、ナイーヴな認識論を持つスコットランド常識哲学があると指摘した。しかし、バーの主張に対し、福音主義の宗教性を、ナイーヴかも知れないが、神のことばの真理を知りうるとする、良い意味でのみことば楽観主義である、と言えないだろうか。例えば、津村氏が聖書を「正面から」学ぶための「歴史的・文法的積義」の確認を主張し、そのような積義に基づく福音主義の批評学の可能性を提唱する時(二頁参照)、そこに、歴史的、文法的解釈により聖書言語の意味あるいは言語が指し示す事実を私たちが知ることができるという楽観主義的認識論があるといえよう。

また、窪寺氏がターミナル患者への伝道との関連で、「聖書の福音は、そのまま福音として伝えるべきである」とし、その理由として聴衆が心の奥底でその福音を必要と認めている、と言う時(一三〇頁)、そこには神のことばに対する楽観主義があろう。

福音主義に立つ積義や説教が近代精神により攻撃されればされる程、みことばに対する悲観主義ではなく、楽観主義が私たちに必要となるのではないだろうか。

C 神の適応 (Accommodatio)

啓示としての神のことは、神が私たち人間の能力や状況にご自分を適応させて啓示されたものである。福音主義が提唱する歴史的・文法的聖書解釈の背後にあるものが神の側における「適応」である。すなわち、神は人間の歴史の中で、人間に理解されうる言語をもって啓示を与えられた。このように、聖書が歴史に状況付けられ、言語上の制約の中で与えられたという事実は、神のことばの神言性を否定するものではなく、むしろ、聖書の解釈者と説教者にめぐみ深い神の「適応」として受け止められるべきものであろう。

II、「積義から」……福音主義の聖書積義

A 落穂拾いの聖書積義とならないために

従来、福音主義聖書論は「対岐的」性格をその特徴としていた。すなわち、福音主義の聖書解釈も自由主義などの聖書解釈に対するアンチテーゼとしての存在意義が強調された。しかし、今会議では福音主義聖書解釈のあり方に關する新しい気運が見られた。それは、単に自由主義のアンチテーゼとしての聖書解釈を提唱することも、また、前提となる聖書観の相違が聖書解釈の相違を結果する事実を無視することでもなく、むしろ福音主義の聖書信仰に立つ、独自の、自律的な解釈の方法と実践を提唱する方向である。

津村氏は言う。

「さて、福音主義者の間で、しばしば『批評派』に対する『保守派』という図式によってみずからの立場が説明されることがある。その反面、福音主義者として『どの程度までなら批評学を受け入れることができるか』という問いかけがなされたりもする。しかし『批評学』というものを必要悪として限定つきで受け入れるのではなく、いかなる『聖書』批評学が我々にとって必要であるかが真剣に問われなければならない」(二頁)と。

また、この点は服部氏が「個々のテキストを中心とする本文積義における作業やアプローチの有効性と妥当性を前提としながら・・・聖書各巻が(究極的には、聖書66巻を正典として)提出する啓示内容を把握しようとする方法／努力の妥当性」(十三頁)と指摘し、宮村氏が「啓示と歴史」のテーマ(三〇頁)や「大きな文派(創造から再創造への文派)」(三七頁)と指摘したところであった。

さて、ここで福音主義聖書積義にとつての一つの課題は「落穂拾いの聖書積義とならないために」という努力であろう。すなわち、聖書を表畑にたとえるとすれば、自由主義的な、否定的批評学が既に刈り取ってしまったものの残

り、落穂のような末端的なものを、拾い集めるようにして扱うのが福音主義聖書釈義であってはならないということである。そうではなしに、独自の聖書解釈の方法と実践に基づいて、全体的な福音主義聖書解釈(学)と呼ぶにふさわしいものが現れてきているのであろうか。

今会議ではこのような方向を示唆するいくつかの試論が見られたように思う。例えば、歴史を犠牲にして啓示を主張するバルトと、啓示を犠牲にして歴史を主張するブルトマンの立場との対称において、「啓示と歴史」双方を主張した宮村氏の提題、また、「ヨナ書の反復」を例証として「総括的アプローチ」を提題した服部氏などが注目された。

B 「その時、そこで」と今、ここで」

福音主義聖書釈義の方法論が伝統的に「歴史的・文法的方法」と呼ばれるものであるという点では、福音主義者の間にかんがりのコンセンサスがあろう。この点で、福音主義聖書釈義は基本に忠実であるべきとしたのは津村氏の提題であった。同氏によれば、釈義の基本とはテキストの「その時、そこで」の意味を明らかにする作業といえよう。すなわち、歴史的・文法的釈義とは啓示の歴史性・言語性を重視する方法であるので、テキストの「その時、そこで」における歴史と文献としての意味を探ることとなる。この観点、すなわち、「その時、そこで」の重視から、同氏はいわゆる「救済史」(Heilsgeschichte)理論と「文学的前史の理論的再建に過ぎない」資料批評、様式史、伝承史の諸説に批判を加えた(二―三頁)。しかし、この基本を踏まえた上ではあるが、福音主義の聖書釈義を築き上げる上で、「歴史的・文法的釈義」を越えて直面する問題にも目を向けることが必要であろう。ちなみに、宗教改革時代における「歴史的・文法的釈義」のチャンピオンはエラスムスに代表されるフマニスト、歴史に深い関心をいだき言語に通じた人文主義者たちであった。ルターに代表される宗教改革者たちは彼らと共通の基盤に立ちつつも、神学的、

聖書神学的解釈を強調した結果、次第に彼らから区別されるプロテスタントの聖書学を築くことになった。

今会議が触れた範囲でこれらの問題を例証すれば、歴史的、文法的釈義と救済史、キリスト論的アプローチ、メシヤ預言、旧・新約聖書の関係などがある。例えば、歴史と実存史とを区別するいわゆる近代の「救済史」理論と歴史的・文法的釈義とは相容れないことは論を待たないが、十六世紀のリフォームド教会内で発展した契約神学などは、聖書の・救済史理解に立った聖書神学であった。さらに、服部氏が聖書解釈のワクの一つとして挙げたタイポロジー、メシヤ預言(一〇頁)の問題、分科会(B―1)で論じられた旧約と新約とに分けられた解釈学や釈義のあり方の問題があろう。そして、これらは宮村氏がスタンダールの指摘として論じた問題、「聖書テキストと解釈者の間に大きく横たわる世紀の隔たりの問題」(三七頁)、すなわち、「その時、そこで」と「今、ここで」との関係の問題にまで発展するのであろう。これらの問題と福音主義は真剣に取り組まねばならないであろう。

C 「その時、そこで」と今、ここで」

歴史的・文法的釈義を基点として、福音主義が独自の聖書解釈学を樹立するにあたり、その解釈学はどの程度批評学的でありうるのか、福音主義以外の批評学の成果をどのように評価しうるのか、福音主義聖書釈義は「いずこへ」行くのか、など福音主義の立場の広がりや今会議において深刻な問題として提示されたように思う。

この点を津村氏は「聖書の解釈に関するシカゴ声明」の「聖書の教えの真実性や誠実さに疑問を差しはさむことのない限りにおいて、聖書批評学は正統とみなされる」という文章をもって例証した(一頁)。服部氏は「聖書観を異にする立場の旧約聖書釈義および解釈の作業と共通する点は、前向きに、そして謙虚に取り入れ」(十三頁)とし、

宮村氏は「聖書的エキュメニズム」(三二頁)の課題であるとした。

聖書積義の広がりを示唆する具体例としては、村上氏が「聖書本文の解釈について、聖書の外から別のカテゴリー

や思想や概念やテーマを持ち込む必要はない。聖書は聖書をもって解釈するという根本原則こそ福音主義の聖書解釈の基本である。この原則の適用に徹したつもりである」(四七頁)としつつ、エレミヤスなどの批評学上の成果を参考にして、マタイ伝の「山上の垂訓」を教会の教え、すなわち、「神の国の民の養育と成長のためのディダケーである」と結論づけたことが触れられよう。

また、「歴史的・文法的・批評的解釈と説教」(B―1)の分科会発題で、山口昇氏は「カナの婚宴」(ヨハネ二：一―十一)を例証し、非神話化論のブルトマンと福音主義の立場を踏まえながらも批評学の成果を積極的に取り入れようとするレオン・モリスそれぞれの解釈を対比しながら、自己の批評学的試みをしている(五四頁)。そこで同氏は、ぶどう酒の奇蹟に関するヨハネの記録においては「歴史的事実性が捨象されて、その意味が強調されている」とし、「水」はユダヤ教、「ぶどう酒」はキリスト教とする比喩的解釈に理解を示している。そして、「ここで問題なのは、果して歴史的・文法的解釈において、このような〔比喩的な〕解釈あるいは適用は妥当なのであるか」(五五頁)と興味深い問題提起をしている。

さらに、同じ分科会(B―1)の三野氏の発題では、歴史的・字義的解釈と歴史的・批評的解釈とが鋭く対峙された。同氏は福音主義的とか自由主義的聖書解釈とかを区別することではなく、より科学的・批評学的解釈に徹することの重要性を提唱した。福音主義聖書解釈が厳密な批評学的検証に耐えうるか、を問うた発題と理解されよう。

なお、この分科会での「広がり」をめぐる討論では、標題の「歴史的・文法的」に加えて「批評的」を加えることは是非、また、「批評的」を「神学的」あるいは「福音主義的」と言い換える提案などが討論されたことも付記されるべきであろう。

III 「説教へ」……福音主義の(聖書)説教

A みことばとみたま

第二分科会(B―2)主題「釈義から説教における聖霊のはたらき」は、宗教改革以来プロテスタント聖書論の大問題である「みことばとみたま」の関係を想定したものであった。すなわち、みことばの釈義と説教とはどのように聖霊の働きと関連するのか。ルターが主張したように両者は密接不可分の関係にありみことばが説教されれば必ずみたまもそこに働く、とするのか。あるいは、ツヴィングリやアナ・バプテストが主張したように両者は理念上区別されるものであるのか。

山口勝政氏の発題の基調は次の文章に明らかであろう。

「正しい聖書積義のために学問的側面として、歴史的・文法的・神学的積義が必要であるとともに、これらが聖霊の照らしによって心の理解にまで至り、真の神礼拝へとみちびかれなければならない。神のみことばが正しく解釈され、語られ、聴衆に受け取られる全過程において、聖霊の照明があり、それを受け取るすべての人の心において、正しく理解され、受けとめられ、その人を変革し、神への服従へと導く。」(六五頁)

河野氏の発題も一貫して聖霊が釈義の段階から説教にいたる全過程において働くことを強調している。しかし、両氏の発題に共通すると思われる問題点は、釈義(歴史的・文法的・神学的釈義)が聖霊のはたらき(内的証明)と具体的に、どのように関わるのかの課題であろう。

第三分科会（B―三）は期せずしてベテランの牧会者泉田氏と新進の牧会者鷹取氏が発題者であった。また、両氏

とも分科会主題「釈義から説教における教会の位置づけ」が不適切なものであるとして、泉田氏は「教会における釈義と説教の位置づけ」と改題し、鷹取氏は「教会を生活の座に持つ説教」とした。ここからも明らかのように、神のことはが教会を形成するのか、あるいは、教会が神のことはの説教を可能にするのか、という、いわば「にわとりが先か、たまごが先か」の問に対しては、両氏とも福音主義の聖書論における教会理解の重要性を訴えたことになった。

泉田氏は、「説教が教会をつくるのではなく、教会が説教をつくるからである。教会との健全な関係を失った説教は、説教者の独善と独語に終わってしまう。」（七三頁）とし、鷹取氏は「釈義から説教へ」のうち説教に焦点を合せて、説教がいかにしたら「教会的」でありうるかを問うた。

一つの関心事は、「釈義」をいかに「教会における」また「教会的な」ものにできるか、であった。この点に関し、泉田氏はボンヘファーを引用し、「聖書のことばが開かれると共に、聖書本文（テキスト）がすでに教会の中で働くのである。いわば言葉が聖書からでて来て、説教としての形をとり、そして教会を担うために教会に向って働くのだともいえよう。」（七五頁）とした。また、鷹取氏は、説教を教会的なものにするための実際的方法の一つとして聖書解釈を位置づけ、「歴史的・文法的解釈」に加えて「教会史的あるいは共同体的解釈」（一二四頁）を提唱した。

C いのちのことは

神のことばが「釈義から説教へ」という過程を経て私たちのところに到達するとき、それは、まさに、いのちのことばであらねばならぬ。

紙面の都合で十分言及できないが、第四分科会（B―四）の主題「説教のための資料の利用」のもとの西氏と後藤氏の大変有益な発題、入船氏の力強い講演「神の言葉と説教」、「実践神学における説教」という主題のもとの岩井氏と窪寺氏の発題は、いずれも、釈義から説教へと準備された神のことばが、力強い、生きたみことばとして提示されるかに関心が寄せられた。この総評のむすびとして、最後の二人の発題者から引用させていただく。

「この終末の暗黒時代、神のことばはもっともっと強く光り輝かなければなるまい。説教が光る時、教会は輝くであらう。教会が輝く時、神は栄光をうけたまうのである。」（岩井氏 一〇八頁）

「聖書の福音は、そのまま福音として伝えるべきである。現代日本人には死に直面して、生を支える信仰をもっているものはほとんどない。聖書のメッセージが死にゆく人々をつくり変え、死に打ち勝たせ、永遠のいのちの希望を与え、唯一のものである。わたしたちは福音を恥とすべきではなく、むしろ、ここにこそ、死にゆく人々への真の解釈があるとの確信に立って、わたしたちの使命をはたすべきである。」（窪寺氏 一三〇頁）

The Third Theological Consultation

A General Survey

Coordinator, Tadataka Maruyama

The Consultation's main theme was "From the Evangelical Exegesis to Preaching." This survey sees three main points in the Consultation, namely, (1) (the exegesis) of God's Word, (2) from exegesis, and (3) to preaching.

(1) Exegesis, first of all, is the interpretation of God's Word.

An interpreter must face the scripture as God's Word, place himself under it, and listen to and obey it. This process may be called his journey to the foundation. In doing so, however, the interpreter's confidence in the scripture is called for. The historico-literal interpretation, which the evangelicals so cherish, requires a positive and optimistic attitude toward the scripture—a kind of confidence that the Word of God can be understood and can be communicated to the people.

(2) From Exegesis

One of the basic difficulties which an interpreter faces is the tremendous gap of time existing between the biblical text and the interpreter, between "what was then and there" and "what is now and here." In order to bridge this gap, several methods of exegesis were discussed, in particular, the salvation-history method was evaluated. In this connection a very difficult question is how far the evangelical interpreter can apply the analytical method.

(3) To Preaching

A question was raised how the Word and the Spirit are related in the process of "from exegesis to preaching." Another question was whether the preaching produces the church or the church produces the preaching. In closing, the survey notes that preaching is the preaching of God's life-giving Word.